

提唱 一都市生活者の農業体験から一

1999年10月、まもなく21世紀に突入しようとしたころ、私たちは農業を始めた。20人ほどの集団は全員都市生活者ばかりで農業はずぶの素人であった。農家から借りた小さな畑は兵庫の西端の相生市、赤穂市上郡町に点在していた。作業は週一回で、遠くは京都市から通う大学教授もいた。

以来18年、畑は相生と宍粟市、昨年からは加西市にまで広まって10haほどになっている。活動、事業の幅も多岐にわたり、6次化はおろか10次産業化におよぼうとしている。

さまざまな体験をしてきたが、当初から抱いてきた大きな疑問点、問題意識は未解決のままである。今やっと解決の糸口を見つけたところといえようか。

1. 中山間地の限界集落 過疎化は広がるばかり

中山間地は人口が減るばかり。特に若者がいなくなっている。高齢化が進み、農業の担い手が激減している。休耕、放棄田がふえ、山に戻っている田畑が多くなっている。高齢者が「俺たちの代でこの村もしまいだな」と嘆く。なぜ若者たちは村から出ていくのか。むらに生活を維持できる仕事場がないからである。むらにわくわくする夢がほしい。

村に仕事を作ろう。農林業とそれに関連する業種の仕事を興こそう。中山間地に人々が大勢楽しく暮らせるようにしよう。

2. 食料は他国に任せてよいのか 自給率40%は先進国で最低

食糧確保は国防に次いで大事な国の責任。なぜこんなに低いのか。日本の食材費の価格が外国と比較して高いからである。生産コストを下げることは不可能か。小規模個人経営が基盤になっている限りコストの削減は難しい。農業の大規模化と経営効率の高い生産コストで生産できるコメや野菜を作ればよい。

3. 農薬を使わないと米や野菜は作れないか

農薬や化学肥料はなぜいけないのか。農薬は虫を殺し、草を枯らす。人間にだって危ない。有機質な土には微生物が生きていく食べ物があるが、無機質な土にはそれがない。化学肥料は土の中の微生物を生きられなくしてしまう。

川や海の魚のえさが減って魚が少なくなっている。小さな変化だけど、生態系に影響が出てきている。世界中で農薬、化学肥料を当たり前のよう使っている。地球環境によくない。私達は食べる立場から考えて、それは危ない。よくないと考えたので、農業を始めた最初から化学肥料は一度も使ったことがない。虫に食べられ病気になり、雑草に負けてしまうこともあるが、それでも収穫がなくなってしまうことはない。

提唱1 農業を企業化する

- 理由 ①個人経営の農業は行き詰っている
- ・経営効率が上がらず、国際的な競争に負けてしまう
 - ・高齢化で労力に耐えられなくなっている
- ②より高品質な農産物生産にチャレンジできる
- ・有機無農薬農産物の生産にチャレンジできる
 - ・より品質の高い農産物の開発にチャレンジできる
- ③より安い価格、大量の生産に対応できる
- ④雇用の拡大がはかれる
- ・中山間地に若者の働く場と生活の場が広がる

提唱2 農業を趣味化し、国民みんなのものにする。

- 理由 ①食糧に国民みんなが関心を持ち、関わられるようにする。
- ・食糧を自分で作って食べてみる
 - ・食べ物の品質、味・価格などへの関心を強め食と健康のかかわりを持てるようにする
- ②食と農を文化教養にして、日本人の食文化、教養を高め観光と合わせて、日本の輸出資源にしていく。
- ③農業をスポーツ化し、国民の健康増進を資することにする。

提唱3 中山間地の里山、山裾を農林公園とし国土総公園化を実現する

- 理由 ①「提唱2」を実現するためのフィールドとして活用する
- ②最大の目的は都市と農村の交流を促進し人口移動を促して、偏在化の是正につながるようにする。
- ③日本の自然環境の良さに高品質化した食と農を加えてに観光資源とし、世界中から来訪者を招くようにする。

まとめ

以上、NPO ひょうご農業クラブ、青年の村、合同会社 夢農業公園を紹介しながら、日本の食、農、村のあり方に大きく貢献できるよう、その構想も提唱した。あとはできるかできないか、やるかやらないかのどちらに立つかの選択だけである。冒頭に紹介したとおり、都市生活者がNPO ひょうご農業クラブに参加し原野化した土地の再生にチャレンジしてきた。今、日本の食、農、村に山積みしている困難極まりない状況を打破していくのは、それを解決していく決心と覚悟である。そんな人たちが集まって世を開き、自分の人生に明日を作り出していこうではないか。